

孔子の思想

(2024.8.23 kenacw)

孔子、名は丘、字は仲尼という。中国春秋時代末期の思想家で教育者。B.C五五二年(五五一年)魯の陬邑(現在の山東省曲阜)で武人の父(当時65歳)と巫女の母(当時16歳)と間に生まれました。正式に結婚して生まれたのではなく、私生児ではないかともいわれています。司馬遷の『史記』によれば、孔子は武人の父の血を引いているのか、身長が二メートル以上と当時まれに見る長身であったとされます。B.C四七九年、七十三歳で没

しています。三歳の時に父を失い、以降、女手一つで貧賤の内に育てられますが、十七歳の時にその母も亡くします。論語に「吾十有五にして学に志す」とあるように、若くして学問で身をたてることを決意し、中国古代の歴史書『書経』や中国最古の詩集『詩経』などを貪るように読み、また、貴賤を問わず、博識な知識人に教えを請い、各種の礼儀作法などを学んでいます。十九歳で宋の亶官氏結婚し、翌年、長男孔鯉(字は伯魚)が誕生。二十歳のころ、下級役人として魯の国に仕え、やがて三十にして立つ」とあるように、一人前の学者として独り立ちします。その頃から彼の名声を慕って弟子になるものが集まって来たといわれます。孔子は魯の国あるいは齊の国で順調に出世の道を歩みますが、四十四歳になると役人としての職を辞し、詩書礼楽(詩経などの文学、歴史書、祭祀や礼儀作法、音楽)を修めて多くの弟子の教育・育成に力を注ぎます。五十二歳のとき、再び魯に仕えて卓越した才能を発揮して出世を重ね、五五歳で大司寇(最高裁長官・刑罰や警察を司る)に昇進し、宰相の職を代行するまでになります。三公族(魯の第十五代君主桓公の子孫の孟孫氏・叔孫氏・季孫氏)の横暴に義憤をいだき、政治改革をはかるも失敗。やむなく職を退いて国を去ります。五十五歳の時に諸侯(衛・陳・宋・蔡・楚)遊説の旅に出ますが、戦国時代に傾斜しつつある諸国の政情はあまりにも不穏急であり、孔子の標榜する徳治主義の理想を受け入れる国はありません。孔子は三度まで命の危険にもさらされながらも十三年間遊説の旅を続けますが、終に現実政治への強い希望を半ば失いつつ魯に戻ります。以後は専ら弟子(後世の付け足しかも知れませんが、門弟三千人といわれます)の教育と研究に専念し、『詞』『書』などの古典の整理編集に力を注ぎます。晩年、長男の鯉、愛弟子の顔回(顔淵)・仲由(子路)に次々と先立たれ、失意のうちに哀公(魯国の二十七代君主)十六年(前四七九)四月己丑(十一日)郷國の魯で没します。 齢七十三歳。遺体は魯の都、曲阜の北、泗水の畔に葬られました。魯国の歴史を編纂して『春秋』を著わし、また、後その後継者によって、孔子とその弟子たちの言行録が編纂されました。これを『論語』といいます。



さて、前書きは以上として、さつそく孔子の思想を表す論語を見ていくことにします。論語は、全篇通して孔子と弟子との対話形式で書かれ、何か特別なテーマや時系列に沿って系統的に編纂されているわけではなく、B.C.二世紀頃(後漢の時代)に現在の十巻二十篇の形に纏められました。「子曰く」という書き出しで始まる章句が500強。その内、短いものは5文字、長くて300字程度です。各篇の冒頭の章句から「学而」や「為政」、「子路」といった二〜三文字の言葉や人の名前をそれぞれの篇の名前としています。合計1万3000字余りで、これは400表示詰め原稿用紙30枚強の分量です。論語二十篇のタイトルとその主な内容を次に示しておきますが、最初から順序だつて読む必要はなく、好きなところから読んでいいわけです。

● 論語の各篇とその主な内容

- | | |
|--------------|---|
| 学而第一 (二六章) | 学びに関する事柄など。 |
| 為政第二 (二四章) | 孔子の政治論。 |
| 八佾第三 (二六章) | 礼儀の重要性や音楽が人々の心を和らげる力について触れている。 |
| 里仁第四 (二六章) | 仁愛や道德についての孔子の言葉が多く含まれ、比較的短い章句が多い。 |
| 公治長第五 (二八章) | 弟子たちのエピソードを多く含む。公治長は孔子の娘婿になった人物。 |
| 雍也第六 (三〇章) | 弟子たちの特性や行動についての多くの教えを含む。 |
| 述而第七 (三七章) | 孔子の言行や教えについて多く含む。 |
| 泰伯第八 (二二章) | 孔子の教え、弟子たちの行動についての多くの教えを含む。 |
| 子罕第九 (三三章) | 弟子達の記録。孔子の哲学や倫理観を多く含む。子罕は孔子の弟子の一人。 |
| 郷党第十 (三三章) | 孔子の郷里や家庭での日常生活の振る舞いなどが記述されている。 |
| 先進第十一 (二六章) | 孔子が弟子たちの特性や行動を評価し、優れた点や欠点について言及。 |
| 顔淵第十二 (二四章) | 顔淵や他の弟子達の問答を通して孔子の教えを明らかにしている。 |
| 子路第十三 (三〇章) | 子路や他の弟子達との問答。前半は政治の在り方に関する問答が目立つ。 |
| 憲問第十四 (四六章) | 道德・政治や個人の行動についての孔子の考え。憲は弟子の名前。 |
| 衛霊公第十五 (四二章) | 孔子様々な教えを含む。衛は孔子遊説の旅で最初に訪れた国の名前。 |
| 季氏第十六 (二四章) | 政治や人間関係に関する教え。孔子が季氏について語った内容を含む。 |
| 陽貨第十七 (二六章) | 孔子の教えをまとめた章の一つ。陽貨は魯の大臣の家宰。 |
| 微子第十八 (二一章) | 微子、箕子、比干のほか、伯夷、叔齊など殷末・周初の人の話。 |
| 子張第十九 (二五章) | 孔子の言葉はなく、子張、子夏、曾子、子貢など高弟の言葉が多い。 |
| 堯曰第二十 (五章) | 論語の最終章。堯帝が舜に天命を授ける場面や、舜が禹にその天命を引き継ぐ場面が描かれている。 |

それでは漢文名作選Ⅰに準拠して論語を見てきましょう。

■ 自述

● 吾十有五にして学じ志す

晩年の孔子の述懐で、自身の一生を振り返って若い頃から今に至るまでを次のように述べています。

子曰、「吾十有五而志乎学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲不踰矩。」
(為政)

子曰く、「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰えず。」と。

※孔子のこのモノログ(独白)は、普通次のように解釈されています。孔子が十五歳で学を志して以来不断の努力を積み重ね、年がいけばいくほどその徳が高くなり、最後には誰も及ばない聖人の境地に達したと、孔子を聖人として称揚します。これに対して、宮崎一定は「論語の新しい読み方」の中で人間孔子という面から次のように解釈されています。十五のときに学に志してから五十になって天命を知るまで、若い頃にはあらゆる苦勞を嘗めて、するだけのことはやってきた。五十にして、人間の運命というものは自分でどうすることもできない超自然・不可知な力(天命)が作用するものだということを知った。しかし、だからといって自分の義務を怠ることなく、失敗しても勇氣阻喪せず、人事を尽くして天命を待つということが一番大事なことだという境地に達した。六十になると若い頃の欲望もや力もすっかり衰えはじめ、どんな悪口や世間の悪いニュースを聞かされてももう腹が立つこともなくなった(耳順う)。七十になると心の欲する所に従って何をやってもそれがマナーの枠をはずみ出すことがなくなった(矩を踰えず)。この解釈の根拠として孔子が七十を越えたころに、「子曰く、「甚矣吾衰也。久矣吾不復夢見周公。」(述而)。子曰く、甚だしいかなわが衰えたるや。ひさしいかな、われまた夢に周公を見ず。〓〓自分も年を取った。もうすっかり気力も衰えてしまった〓〓という孔子の嘆声を挙げています。いずれにしても、私は宮崎の解釈の方が好きです。尚、この章から年齢に関するいくつかの熟語が生まれました。

・志学〓十五歳 ・而立〓三十歳 ・不惑〓四十歳 ・知命〓五十歳 ・耳順〓六十歳

孔子は言った、「私は十五の時に学問で身を立てようと決心した。三十で独立し、四十になるといよいよ確信が生まれ、心に惑いがなくなった。五十になって人間は人知を越えた天の不可知な力(天命)によって運命は左右されるものだとこのことを知り、人事を尽くして天命を待つという境地に至った。六十になれば若い頃の気力も衰えはじめ、何を言われ聞いたりしても気が荒立つことはなくなった。七十になるともう何をやっても羽目を外すことはない。」と。

● 女子を以て多く学びつゝ人を識るものゝ為すか

子曰、「賜也、女以予爲多学而識之者乎。」

対曰、「然。非与。」曰、「非也。予一以貫之。」

(衛靈公)

子曰く、「賜や、女は予を以て多く学びて之を識る者と為すか。」と。対入て曰く、「然り。非なるか」と。曰く、「非なり。予は一以て之を貴ぬ」と。

※孔子は賜(子貢)。孔門十哲の一人で孔子より三十一歳年少。弁舌に優れ、衛・魯でその外交手腕を發揮し宰相を歴任。また、商才にも恵まれた。「私」のことを博学多識の人物だ」と思っているのか?と問い、子貢は素直にハイと答えます。孔子は「そうじゃないよ、私の思想の根幹はただひとつの道で貴かれているのだ」と子貢に答えます。それでは「一以て之を貴く」とは何でしょう。次の曾子との問答で明らかになります。

孔子は言った、「賜(子貢)よ、おまえは私が多くを学んでそれをよく理解している人間だと思ってるかい」。子貢が答えた「はい。違うのですか」。孔子は言われた「違うよ。確かにいろいろな学問を学んできたので博識な人物であるかのように映っているかも知れないが、私はただ一つの事で万事を貫いているだけだ。」と。

● 吾道一を以て之を貴く

子曰く、「参乎、吾道一以貴之。」曾子曰、「唯子出。門人問曰、「何謂也。」曾子曰、「夫子之道、忠恕而已矣。」

(里仁)

子曰く、「参や、吾道は一以て之を貴く。」と。曾子曰く、「唯」。子出。門人問ひて曰く、「何の謂ひぞや。」曾子曰、「夫子の道は忠恕のみ。」と。

※孔子は曾子(諱は参、字は子輿)。孔子より四六歳年少で親孝行の人として知られ、孔門十哲には入っていないが孔子の信頼は厚かった。「私の道は一以て之を貴く」と述べると、門人たちはその意味する所を掴みかねている中で曾子は「はい、わかっております」と答え、「夫子の道は忠恕のみ」と喝破しています。孔子の言う「道」は、現実の世で身を処していく上での人として必要な守るべき道徳・規範のことで、その道は「忠恕」とまり「真心」一本で貴かれているのだと言っています。道は、君主ばかりでなく、あらゆる人々に対して貴かれています。論語・述而第七に、子曰、「志於道、據於徳、依於仁、游於藝。」子曰く、「道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」＝「正しい道を目指し、徳を根拠とし、仁に寄り添って、芸に遊ぶ。」とあります。

孔子は言った。「参よ、私の道は一つのことだ。貴んでいるのだよ。」と。曾子は、「はい、承知しております。」と答えた。孔子が部屋を出ていくと同席していた他の門人達が、「いまのお言葉はどいう意味か」と問った。曾子は、「先生の道は忠恕(真心)一つだけなのです。」と答えた。

■ 学問

● 学びて時に之を習ふ、また説しかしむべし

子曰、「学而時習之、不亦說乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。」

(学而)

子曰く、「学びて時に之を習ふ、亦説はしからずや。朋有り、遠方より來たる、亦た樂しからずや。人知らずして愠らざらず、亦た君子ならずや。」と。

※あまりにも有名な論語の一節ですね。余談ですが「学びて時に之を習ふ」から学習院大学の名前ができたとか。さて、何を学んでいたのかというと「詩書礼樂」(詩：詩経などの文学、書：歴史書、礼：祭祀や礼儀作法、樂：音楽)とされます(当時、紙はまだ発明されておらず(後漢の時代)、竹簡や木簡が使われていました。ただ、これらは一般には普及しておらず、「学ぶ」というのは本^{ほん}を読んで学ぶというより、師や先輩からの口伝が主流だったと思われます)。孔子は弟子たちからは非常に尊敬されていましたが、魯の国の一般人達からは、何をあの変わり者が^{なに}という目で見られていたようで、わざわざ遠方から孔子を慕って人がやって来ればその喜びは相当なものがあったと思われます。

孔子は言った、「詩書礼樂を」学んで機会があるたびにそれを復習し身に付けていく、なんと喜ばしいことではないか。遠方から時々私を慕ってやってくる人がある。こういう時こそ本当に嬉しいものだ。世間が認めてくれないからといって、そんなことは無視して気にもかけず、自分を磨くために学問に励む。それでこそ君子(学識・人格ともに優れた人)というべきではないか。」と。

● 子曰く、「学びて思はざれば則ち殆ぶ。」

子曰く、「学而不思則罔。思而不学則殆。」

(為政)

子曰く、「学びて思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆ぶ。」と。

※何事にも通じる金言ですわね。

孔子は言った、「師や先輩から(詩書礼樂といった)学問を学んでも、それについて納得するまで自分で深く考究することを怠ると、物事の道理が身につかず、何の役にも立たないぞ。自分の見識だけでの狭い思索に閉じこもり、広い知識を身に付けようと努めなければ独断に陥って危険だぞ。」と。

● 子曰く、「吾嘗終日不食、終夜不寢、以思。無益。不如学也。」

子曰く、「吾嘗終日不食、終夜不寢、以思。無益。不如学也。」

(衛靈公)

子曰く、「吾嘗終日不食、終夜不寢、以思。益無し。学ぶに如かざるなり。」と。

※前項で、「思ひて学ばざれば則ち殆し」とあります。思索の基になる学問・知識の蓄えがなく、ただ闇雲に考えに耽^ひてもそれは益のないことだといえます。思索の基となる知識を内に蓄えることがまず肝要ということですね。孔子は言った、「私はあるとき、一日中飯も食わず、一晩中寝もしないである問題について思索に耽^ひったことがあった。しかし結局得るところはなかった。無駄に思索することは学ぶことには及ばないといふことだ。」と。

●女に之を知るを誨^{おし}へんか

子曰、「由、誨女知之乎。知之為知之、不知為不知。是知也。」

(為政)

子曰く、「由、汝に之を知るを誨^{おし}へんか。之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す。是れ知るなり。」と。

※「由」は孔門十哲の一人で子路の名(季路とも呼ばれる)。孔子より九歳年下で、最年長、最古参の弟子。武勇を好み一本気で飾り気がなく、直情径行で孔子に思うことをスケスケと言つ。孔子に気に入られ可愛いがられた。さて、知る“と”ということは必ずしも“こと”か、孔子は子路に諭^{さと}します。“知る”ということは単にその知識を有しているというだけではなく、その知が体現・実践できてはじめて知るというんだ、と。

孔子は言った、「由や、お前に、知る“と”言つたことを教えてやろう。知っていることは知っていると、知らないことは知らないとはっきりと峻別する。これが、知る“と”という事なのだ。」と。

●之を如何せん

子曰、「不曰如之何、如之何者、吾未如之何也。曰矣。」

(衛霊公)

子曰く、「之を如何せん、之を如何せん」と曰^いゆる者は、吾之を如何ともする未^なきのみ。」と。#

※棚ぼたはないということでは、常に疑問をもってそれを何とか解決しようとする苦闘することのない人に対してはさすがの孔子も何の手助けもできないというところだです。つまり、一瞬^{一瞬}同時^{同時}の消息^{そくし}で済^すむか。

孔子は言った、「べししたらぬらるか、べししたらぬらるか、と自^{みづか}らに問^とうことのない人に対しては、私はべしするところもできないのだ。」と。

●辛子何寝ぬ

辛子何寝。子曰、「朽木不可雕也。糞土之牆、不可朽也。於子与何誅。」子曰、「始吾於人也、聽其言而信其行。今吾於人也、聽其言而觀其行。於子与改是。」

(公冶長)

宰予昼寝。子曰く、朽木は雕るべからずなり。糞土の牆は、朽るべからざるなり。予に於いてか何ぞ誅めん。」と。子曰く、「始め吾人に於けるや、其の言を聴きて其の行ひを信ぜり。今吾人に於けるや、其の言を聴きて其の行ひを觀る。予に於いてか是を改む。」と。

※宰予（宰我）は孔門十哲の一人で孔子より二六歳年少。子貢と並び弁舌の才があった。ただ、実利主義的で徳を軽視したため孔子から屢々叱責を受けています。ここでは、孔子が講義をしているとき宰予が寢室で昼寝していることを知り、なんとという怠惰者だと激怒しているくだりです。このこと以来、人の見方も言行一致の人物か否かと見方を變えたといえますから、愛弟子宰予を出汁にして弟子たちを奮励したのではないかと思えます。

宰予が昼間から寢室にこもっていた（一説には女と昼間から寝ていたとの解釈あり）。孔子は言った、「腐った木には彫刻はできない。ぼろぼろの土塀（糞土の牆）は「テ」朽（で塗り固めることはできない。そんな宰予に対しては、もつ何も叱ることもない。」と。その後）孔子は言った、「今まで私は、人に出会うと、その人の言うことを聞いてその行いを信じた。しかし今の私は、その言うことをよく聞いたうえで、その行いもよく見るようにした。宰予のこと以後、そう改めたのだ。」と。

●陳亢、伯魚に問ふ

陳亢、問於伯魚曰、「子亦有異聞乎。」対曰、「未也。嘗獨立。鯉、趨而過庭。曰、『学詩乎。』」対曰、「未也。』」鯉返而学詩。他曰、又獨立。鯉、趨而過庭。曰、『学礼乎。』」対曰、「未也。』」鯉、退而学礼。聞斯二者。「陳亢退而喜曰、問一得三、聞詩、聞礼、又聞君子之遠其子也。」

（季氏）

陳亢、伯魚に問ひて曰く、「子も亦た異聞有るか。」と。対入て曰はく、「未だし。嘗て独り立てり。鯉趨りて庭を過ぐ。曰く『詩を学びたるか』と。対入て曰く、『未し。』と。『詩を学ばざれば以て言ふこと無し』と。鯉退きて詩を学べり。他曰、又独り立てり。鯉、趨りて庭を過ぐ。曰く、『礼を学びたるか。』と。対入て曰く、『未だし。』と。『礼を学ばざれば、以て立つこと無し。』と。鯉退きて礼を学べり。斯の二者を聞く。」と。陳亢、退きて喜びて曰く、「一を問ひて三を得たり。詩を聞き、礼を聞き、又君子の其の子を遠ざぐるを聞けるなり。」と。

※陳亢は孔子の弟子で字は子禽。孔子より四〇歳年少。陳亢は孔子の長男伯魚に、貴方は父上から何か特別な教えでも受けていますか？と聞くと、伯魚は特別に何もありません。「詩経」と「礼法」をしっかりと学んでおきなさいと言われただけです、と答えます。陳亢はこの問いかけで「詩」と「礼」の重要さが再認識でき、その上に師の依怙鼻肩のない公正な姿勢に感銘を受けています。

詩経：周王室や諸侯の儀式で詠われた歌から民衆の恋歌等が含まれ、孔子は詩を通して人の感情や道徳を教えた。

礼法…礼を単なる儀礼や作法としてだけでなく、社会の秩序や人間関係の基本としなる必須教養として教えた。

陳亢が伯魚に質問して言った、「あなたもまた他の先生のご子息のように、お父様（孔子）から何か特別な教えでも受けているのでしょうかね。」と。伯魚は答えて言った、「まだ、ありません。ただ、ある時、父が一人で縁側に立っていて、私（鯉）が小走りでその前の庭を過ぎようとしたとき、父は私に『詩経を学んでいるか。』と声をかけました。『まだです』と答えると、『詩経を学んでおかないと一人前の人としてもが言えないぞ。』と言いました。私は部屋に戻ると詩経を学び始めました。他日、また父が一人で縁側に立っているところを、私は小走りで庭を通り過ぎようとしていました。そのとき父は『礼法を学んでいるか。』と言いました。『まだです。』と答えると、『礼法を学んでおかないと人前でどう振る舞えばいいかわからないぞ。』と言いました。私は部屋に戻ると礼法を学び始めました。この二つのことを聞いたことはあります。」と。陳亢は家に戻ると喜んでこう言った、「二つのことを質問して三つのことがわかった。詩を学ぶことの大切さを聞き、礼を学ぶことの大切さを聞き、また、君子は自分の子を遠ざけてあまやかすことがない。」というのを聞いた。」と。

●詩に興り、礼に立ち、樂に成る

子曰、「興於詩、立於礼、成於樂。」

（泰伯）

子曰く、「詩に興り、礼に立ち、樂に成る。」と。

※「詩」は詩経、「礼」は礼法、「樂」は音楽。孔子は音楽にも造詣が深く、二五弦の大琴・瑟や七弦の琴をよく奏で、作詞作曲もしたと言われます。詩（人間の心）と礼（人間の態度・振る舞い）と音楽（情操）の三つが学問の基礎で、これらは人格者として成長していく上で大切な教養だと説いています。

孔子は言った、「詩を学んで人の心・人の情けが分かる人になっていこう、礼を学んで社会人としての基本的な素養・教養を身に付けよう、そして音楽は人の心をなごやかにし、情感を豊かにするものであるから、音楽を学び身に付け、実践してゆくことで平和な社会をもたらす努力をしてゆこう。」と。

●三人行へば必ず我が師有り

子曰、「三人行、必有我師焉。择其善者而从之、其不善者而改之。」

（述而）

子曰く、「三人行へば、必ず我が師有り。其の善なる者を択びて之に従ひ、其の不善なる者にして之を改む。」と。

※孔子は貧賤の中で育ったので、門を叩いて教えを乞うことなどはできず、周囲のこれはと思う人を師として、見聞きしたことをすべてを自分の勉学の素材としたと言われています。そのような経験から、見習うべき人や事柄は必ず何処にでもあるものだ。良い点は大いに見習い、良くない点は自分を振り返る材料とできる、と説いています。

孔子は言った、「三人一緒に行動すれば、そこには必ず自分の師とすべきことがある。その善い点を選び取ってそれを見習い、その良くない点は自分を反省して改めよう。」と。

■君子

●君子は器ならず

子曰、「君子不器」

(為政)

子曰く、「君子は器ならず。」と。

※器というのは使い道が決まっていますが、君子（優れた人格者）は、そんな器のような形の決まったものではないぞ、諸事に通じていて物事に柔軟に対応していける人だ、と説いています。

●君子は食飽かんと事を求むるに止りて無く

子曰、「君子食無求飽、居無求安。敏於事而慎於言、就有道而正焉。可謂好學也。」(学而)

子曰く、君子、食飽かんと事を求むること無く、居に安からんと事を求むること無し。事に敏にいて言に慎み、有道に就きて正す。学を好むと謂うべきのみ。」と。

※学問に取り組む心構え・態度を説いています。学問は知識をひけらかしたりするためにやるのではなく、その中身をしっかりと身に付け、その実践を通して自身に一層の磨きをかけていく。このような人こそ好学の士と言える。

孔子は言った、「君子たるものは、食事は腹一杯食べようと望むことはないし、安楽な家を望むこともない。物事に対しては素早く行い、言葉は慎重にして軽はずみな行動は慎み、道義を身に付けた人について善し悪しを自ら正していゆく。このような人こそが、真に学問を好む人というべきだ。」と。

●君子重からざれば則ち威あらず

子曰、「君子不重則不威。学則不固。主忠信。无友不如己者。過則勿憚改。」

(学而)

子曰く、君子重からざれば則ち威あらず。学べば則ち固ならず。忠信を主とす。己に如かざる者を友とする無かれ。過ちては則ち改むるに憚ること勿れ。」と。

※「過ちては則ち改むるに憚ること勿れ」。このフレーズは小生がサラリーマン時代、先輩からよく聞かされた。さて、ここは君子の振る舞いについて論じています。「君子重からざれば則ち威あらず」とは、重厚な雰囲気は学問の研鑽を通して自然に外に出てくるもので、逆にそれが感じられないようなら本当の学問をしていないことだ。真摯に学問に向きあうことが大事だと説いています。

孔子は言った、「君子たるは、重々しい雰囲気があれば威厳がない。学問に励めば頑固でなくなり頭が柔軟になる。真心（「忠」と誠）（「信」）を中心に据える。自分に及ばない者は友とするな。過ちを犯したとしたら、何の躊躇いもなくそれを改めよ。」と。

● 質文に勝てば則ち野なり

子曰、「質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子。」

（雍也）

子曰く、質文に勝てば則ち野なり。文質に勝てば則ち史なり。文質彬彬として、然後君子なり。」と。

※中身と外見の両面を兼ね備えバランスのとれた（彬彬）人が君子であると孔子は言います。「質」はもって生まれた本質で質朴とか素朴という意。「文」は学問を通して身に付いた洗練された容姿や態度。「史」は文書を司る役人ですが、ここでは知識はあるが誠実さに欠けるインテリの代名詞として使っています。

孔子は言った、「その人のもって生まれた質朴さが、学問で培った洗練された振る舞いを抑えているような人は粗野な田舎者といえる。外見ばかりが立派で本来の質朴さを抑えている人は吏官（役人）のように誠実さに欠けた人と言える。質朴さと教養とを兼ね備えた人がはじめて君子と言える。」と。

● 君子は質なるのみ

棘子成曰、「君子質而已矣。何以文爲。」子曰、「惜乎、夫子之説君子也。駟不及舌。文猶質也。質猶文也。虎豹之鞞、猶犬羊之鞞。」

（顔淵）

棘子成曰く、「君子は質なるのみ。何ぞ文を以て為さん。」と。子曰く、「惜しいかな、夫子の君子を説くや。駟も舌に及ばず。文は猶ほ質のごときなり。質は猶ほ文のごときなり。虎豹の鞞は、猶ほ犬羊の鞞のごときなり。」

※衛の国の大夫（官僚）棘子成は、君子というのは中身の實質こそが大事で外見まで飾る必要はないかと言います。それに対し子貢は、美しい模様や斑点のある虎や豹の毛皮は、毛を繕ってしまえば犬や羊の毛皮と同じになってしまうではないか。君子は「質」と「文」の双方揃っていることが大切なことだと言います。

棘子成は言った、「君子は自らの内面・本質だけが大事だ。どうして外面を彩る教養を身につける必要があるのか。」と。子貢は言った、「残念だなあ、あの人の君子についての説は。一度口にした言葉は取り消すとしても四頭立ての馬車（駟）でも追い付けないのに。教養は資質と同じく重要で、資質は教養と同じに重要なのだ。虎や豹の毛を取り去ったなめし皮（鞣）は、犬や羊のなめし皮と同じものになってしまう。虎や豹は毛があるから価値があるのと同様に。君子も資質だけでなく教養が大事なのだ。」と。

●君子も亦た悪むこと有るか

子貢曰、「君子亦有惡乎。」子曰、「有惡。惡稱人之惡者。惡居下流而訕上者。惡勇而無礼者、惡果敢而窒者。」曰、「賜也亦有惡乎。」「惡徼以為知者。惡不孫以為勇者。惡計以為直者。」

（陽貨）

子貢曰く、「君子も亦た悪むこと有るか。」と。子曰く、「悪むこと有り。人の悪を称するものを悪む。下流に居りて上を訕る者を悪む。勇にして礼無き者を悪む。果敢にして窒がる者を悪む。」と。曰く、「賜や亦た悪むこと有るか。」と。「徼ひて以て知と為す者を悪む。不遜にして以て勇と為す者を悪む。計きて以て直と為す者を悪む。」と。

※子貢は孔子に「君子と言われる人格者でも人を憎むことはありませんか」と問うと、孔子は「そりゃあるさ」と答え、次の4つのタイプを上げています。①人の欠点を評う者、②高い地位にいる者を悪むさまに言う僻み者、③蛮勇ばかりで礼を失っている者、④物事を軽々に判断・行動し、すぐ行き詰まる者。いつの世も変わらないというか……

子貢が質問した、「子でも人を憎むことがありますか。」と先生は言われた、そりゃ君子でも憎むことはあるよ。人の欠点を言いふらしまわる者を憎む。下位の者でありながら上位の者の悪口を言う者を憎む。勇ましがって礼儀知らずの者を憎む。積極果敢ではあるが、すぐに物事を放り出してしまっ者を憎む。」と。子貢に言った、「賜（子貢）よ、お前も憎む者がいるか。」と。子貢は答えた。「他人の考えを盗用して、さも自分の考えのように言う者を憎みます。また、自分の傲慢な振る舞いを勇気があるなどと思ひ込む者を憎みます。さらに、他人の秘密を暴いて、それが正直の表れであると思う者を憎みます。」

● 富と貴とは、是れ人の欲するところなり

子曰、「富与貴、是人之所欲也。不以其道得之、不处也。貧与賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必是。」（里仁）

子曰く、「富と貴とは、是れ人の欲する所なり。其の道を以て之を得ざれば、処らざるなり。貧と賤とは、是れ人の惡む所なり。其の道を以て之を得ざれば、去らざるなり。君子仁を去りて、惡くにか名を成さん。君子は終食の間も仁に違ふこと無く、造次にも必ず是に於いてし、顛沛にも必ず是に於いてす。」と。

※君子はいついかなる時でも「仁」に基づいた行動をするものだと言っています。行住坐臥、不斷に「仁道」から離れないということでしょうか。尚、「仁道」についてはこの後詳しく見ていきます。

孔子は言った、「地位と財産は、誰でも欲するものだね、何ら否定する理由はない。しかし、君子は、正しい道理（仁道）でもってそれを手に入れたのでなければ、ことさらそれに執着はしない。また、貧乏と卑賤は、誰でも嫌がるものだ。正しい道理（仁道）を通してそのような境遇になったのであれば、そこから脱け出そうとはしない。君子が仁を捨て去ったら、どこに君子という名声が成り立つかな。君子は食事を終えるまでの短い間でも仁に背くことはない、また、咄嗟の慌てふためいた瞬時（造次）でも仁に基づいて行動し、つまずいて転ぶような場合でも仁をもって行動をするものだ。」と。

● 己を脩めて以て敬す

子路問君子。子曰、「脩己以敬。」曰、「如斯而已乎。」曰、「脩己以安人。」曰、「如斯而已乎。」曰、「脩己以安百姓。脩己以安百姓、堯舜其猶病諸。」（憲問）

子路君子を問ふ。子曰く、「己を脩めて以て敬す。」と。曰く、「斯くのごときのみか。」と。曰く、「己を脩めて以て人を安んず。」と。曰く、「斯くのごときのみか。」と。曰く、「己を脩めて以て百姓を安んず。己を脩めて以て百姓を安んずするは、堯・舜も其れ猶ほ諸を病めるか。」と。

※子路は孔子に、ズバリ君子となるための条件は何かと問います。それは己を正すことによつて一般庶民の心を安静にすることだと。このことは簡単なように見えるが、聖天と言われた堯・舜も苦勞されたほど難しいことだとと説いています。

子路が、君子となる条件について問うた。孔子は「自己を修養し、そして慎み深くすることだ。」と答

えた。子路は、「それだけのことですか。」と言う。孔子は、「己を修養して、周りの人の心を安らかにさせることだ。」と言う。子路は、「そんなことだけですか。」と問うと、孔子は、「自分自身を修養し、そしてすべての人の心を安らかにさせることだ。」お前は簡単なことのように思っているようだが、自分自身を修養し、そしてすべての人の心を安らかにさせることは、かの堯・舜のような聖天子でも、苦勞されたであろうな（容易なことではないぞ）。」と。

■ 仁道

● 樊遲仁を問ふ

樊遲問仁。子曰、「愛人。」

(顔淵)

樊遲仁を問う。子曰く、「人を愛す。」と。

※樊遲は孔子より三六歳年少（史記）の弟子。樊遲が孔子に「仁」とは何ですかと問うと、孔子は「人を愛することだ」と明快に答えています。また、孔子は樊遲の「仁」についての質問に次のようにも答えています。

樊遲問仁。子曰、「居処恭、執事敬、与人忠雖之夷狄不可棄也。」

(子路)

樊遲仁を問う。子曰く「居処恭しく、事を執りて敬し、人と忠なるは、夷狄に之くと雖も、棄つるべからざるなり。」と。

※樊遲の「仁」についての質問に孔子は、「仁」は恭・敬・忠の三位一体の用きだと答えます。

樊遲が仁について尋ねた。孔子は言った、「家にいる時は慎み深く(恭)、仕事をする時は慎重に(敬)、人に対しては真心(忠恕)を尽くす。これらのことは例え辺境の異民族の地に行ったとしても決して身から離すものではない。」と。

● 巧言令色鮮仁

子曰、「巧言令色、鮮矣仁。」

(学而)

子曰く、「巧言令色、鮮きかな仁。」と。

※余りにも有名なフレーズ。「巧言」は誠実味のない口先だけの言葉、「令色」は相手に気に入られようとうわべの愛想をふりまくこと。「鮮」は極めて少ないという意。

● 剛毅朴訥は仁に近し

子曰、「剛毅朴訥近仁。」

(子路)

子曰、「剛毅朴訥は仁に近し。」

※ 「剛毅」は無欲で果敢なこと。「朴訥」は質朴で飾りがなく訥弁であること。これらの「質」に「文」が加われば「文質彬彬」となって「仁」を体現する君子となる。

● 博く学びて篤く志し、切に問いて近く思ふ

子夏曰、「博学而篤志、切問而近思。仁在其中矣。」

(子張)

子夏曰、「博く学びて篤く志し、切に問いて近く思う。仁其の中に在り。」

※ 子夏は孔門十哲の一人、その中で最も年少で孔子より四四歳下。子夏は「学問と仁」について次のように述べています。広く学問を学んで、空理・空論に走るのではなく、身近な日常の問題を照らし出して己の問題として深く思索・実践していく。仁はこのような中に必ずから存在している。

子夏は言った、「博く学び、地道で堅固な意思を持ち、分からないことはどこまでも尋ね、それを自身に引き当てる実践を目指す。そうすれば、仁という徳はそこから自然と湧き出してくる。」と。

● 孝弟なる者は其れ仁の本たるか

有子曰、「其人為也、孝弟而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作乱者、未之有也。」

(学而)

君子務本。本立而道生。孝弟也者、其為仁之本与。」

有子曰く、「其の人と為りや孝弟にして、上を犯すを好む者は鮮なし。上を犯すことを好まずして、乱を作すことを好む者は、未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁の本たるか。」

※ 有子の詳細は不明ですが、孔門下の一人で孔子より二三歳年下とされています。さて、有子は「仁」の根底に横たわるものとして孝弟という「質」をあげています。

有子は言った、「その人柄が親しい、兄思いであって、しかも目上の人に逆らうことが好きな人は、まずいない。目上の人に逆らうのを好まずして秩序を乱すことが好きな人は、今までいたためしがない。」

君子は、物事の根本・本質を明らかにしようと努力を重ねる人だ。そうすることで初めて道理が明らかになる。親しい兄思いというところ、その、仁の根本であるつか。」と。

●「仁者其の言もや訥（とつ）び」

司馬牛問曰。「子曰く、仁者、其の言もや訥（とつ）び。曰く、其の言もや訥（とつ）べば、斯（すな）は之を仁と謂（い）ふか。」と。子曰く、「之を為（な）すこと難（がた）し。之を言（い）ふこと、訥（とつ）びること無（な）きを得（え）んや。」と。

(顔淵)

司馬牛仁を問ふ。子曰く、「仁者は、其の言ぶや訥（とつ）び。」と。曰く、「其の言ぶや訥（とつ）べば、斯（すな）は之を仁と謂（い）ふか。」と。子曰く、「之を為（な）すこと難（がた）し。之を言（い）ふこと、訥（とつ）びること無（な）きを得（え）んや。」と。

※司馬牛は孔門下の一人で、孔子の命を狙った宋の司馬桓魋の弟でもあり、多弁で口数多く、騒がしい人物だったようです。その司馬牛が仁について孔子に質問します。孔子は司馬牛の性格を踏まえて、仁者は口軽ではないぞと諭（さと）しています。「訥（とつ）び」は「忍（しの）ぶ」という字義があり、言葉を控えるという意味。

司馬牛が「仁」について尋ねた。孔子は言う、「仁者」というものは、発言を控えめにすることだ。」と。すると司馬牛は、「発言が控え目であれば、それでも仁と言っているのでしょうか。」と。孔子は言った、「発言したことをその通りに実行することは難しいものだ。となれば、発言も控えめにしなければゆかないだろう。」と。

●「己に克ちて礼を復むを仁と為す」

顔淵問曰。「子曰く、己に克ちて復礼（こく）を為（な）す。一日に克ちて復礼（こく）を為（な）す。天下に帰仁（き）ん焉（や）。為（な）すに由（よ）り、而（しか）ば人（ひと）乎（や）哉（や）。」顔淵曰、「請問其目（こ）。」子曰、「非礼勿視（ひれいぶくし）つ。非礼勿言（ひれいぶくごん）ふ。非礼勿動（ひれいぶくどう）ふ。」顔淵曰、「回（こ）雖（しか）も不敏（ふみん）なり。」

(顔淵)

顔淵仁を問ふ。子曰く、「己に克ちて礼を復むを仁と為す。一日己に克ちて礼を復まば、天下仁に帰せん。仁を為すは己に由る、而して人に由らんや。」と。顔淵曰く、「請ふ其の目を問はん。」と。子曰く、「礼に非ざれば視ること勿れ。礼に非ざれば聴くこと勿れ。礼に非ざれば言ふこと勿れ。礼に非ざれば動くこと勿れ。」と。顔淵曰はく、「回、不敏なりと雖も、請ふ斯の語を事とせん。」と。

※顔淵（顔回）は孔門十哲の一人で、孔子より三〇歳年少。孔子が「顔回ほど学を好む者を聞いたことがない」と絶賛するように門下随一の秀才。若くしてその将来を嘱望されたが、孔子七十一歳の時に四十一歳の若さで早逝しています。顔淵の「仁」とは何かという問いに対し、孔子は「克己復礼だ」と答えています。

顔淵が仁について孔子に尋ねた。孔子は言う、「自己の欲望に打ち克って礼を實踐（復む）してゆくの
が仁だね。昼夜分かつたず。自己に打ち克って礼を實踐してゆけば、天下の人々はみな仁に立ち帰って
ゆくだろう。仁の實踐は自分自身の克己努力によるのであって、どうして他人の力によるものである
うか。」と。顔淵は更に問う、「どうか、その眼目をお聞かせください。」と。孔子は言う、「礼に外れ
たことは見てはいけない。礼に外れたことは聴いてはいけない。礼に外れたことは言ってはいけない。
礼に外れたことは、行ってはいけない。」と。顔淵は言う、「私は鈍くさく、才知・才能もありません
が、先生の仰った克己復礼の實踐に努力して参ります。」と。

● 子曰、「当仁、不让於師。」

子曰、「当仁、不让於師。」

（衛靈公）

子曰く、「仁に当たりては、師にも譲りませぬ。」

※師や目上の人を立てることは大切な深慮であるが、こと仁の實踐においては何ら師や目上の方に遠慮することなく、どんどん実践して自己を磨いてゆきなさいと説いています。

● 己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す

子曰、「如有博施於民、而能濟衆、何如。可謂仁乎。」子曰、「何事於仁。必也聖乎。堯・舜其
猶病諸。夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人。能近取譬、可謂仁之方也。」（雍也）

子曰く、「もし博く民に施して、能く衆を濟ふこと有らば、何如。仁と謂うべきか。」と。子曰く、「何ぞ仁に事まらん。必ずや聖か。堯・舜も其れ猶ほ諸を病めるか。夫れ仁者は、己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。能く近く譬へを取るを、仁の方と謂ふべきのみ。」と。

※仁者に至る道を説いています。自分が立身しようとして先に人を立身させ、自分が榮達しようとして先に人を榮達させる。自身に引きくらべつつ相手のことを考える、このようなことができることこそ仁に至る道だ。

子貢が言った、「もし為政者があまねく人民に恩恵を施して、民衆を救済することができるなら、いかがでしょうか、仁者と言ってよいでしょうか。」と。孔子は言った、「仁者どころではないぞ。それこそ聖人だな。あの聖天といわれる堯・舜でさえ、なかなか難しいことだと悩まれていただろう。そもそも仁者は、自分がある立場に立つと思うたら他人をその立場に立たせ、自分がある目的を達しようと思つたら他人にその目的を達せさせる。」と。そして、自身に引き比べて考えることができることこそ、仁に至る方法ということができるのだね。」と。

■政治

● 其の身正しければ令せずして行はれ

子曰、「其身正、不令而行、其身不正、雖令不從。」

(子路)

子曰く、「其の身正しければ、令せずして行はれ、其の身正しからざれば、令すと雖も従はれず。」

※いつの時代も上に立つ人間は清廉潔が要求されますね。

孔子は言った、「為政者自身が正しければ、政令を発しなくても正しい政が行われるが、為政者自身が正しくなければ、いくら政令を発したとしても正しい政は行われぬ。」と。

● 苟くも其の身を正しくせば

子曰、「苟正其身矣、於從政乎何有。不能正其身、如正人何。」

(子路)

子曰く、「苟くも其の身を正しくせば、政に従ふに於て何か有らん。其の身を正しくすること能はずんば、人を正しくするを如何せん。」と。

※「自反而縮雖千萬人吾往矣」―自ら省みて縮くんば一千万人といえども吾往かん―(孟子)。人の上に立つ人はこの気概が必要ですな。

● 之を導くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば

子曰、「導之以政、齊之以刑、民免而無恥、導之以德、齊之以礼、有恥且格。」

(為政)

子曰く、「之を導くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば、民免れて恥づること無し。之を導くに徳を以てし、これを齊ふるに礼を以てすれば、恥づること有りて且つ格る。」と。

※人民を統治してゆくにあたつての為政者の心得を説いています。すなわち、政令(規制)や刑罰は一見効果がありますが、どっこい人民は強かですその目をかいくぐることしか考えない。しかし、道徳と礼儀による政を行つていけば、人民に恥の心が芽生え、自然に統治がうまくいくものだ。

孔子は言った、「人民を指導してゆくの政令を發布し、人民の統制を刑罰によつて行えば、人民は規制や刑罰から逃れようとするだけで恥づることもない。しかし、人民を指導してゆくの道徳によつて行い、人民を統制していくのに礼儀によつて行えば、人民は恥づる心を持ち、さらに正しい道に進んでゆへ。」と。

● 鶏を割く馬くぞ牛刀を用ゐんや

子之武城、聞弦歌之声。夫子莞爾而笑曰、「割鶏焉用牛刀。」子游対曰、「昔者、偃也聞諸夫子。曰、『君子学道、則愛人、小人学道、則易使也。』」

子曰、「二三子、偃之言是也、前戲之耳。」

(陽貨)

子武城に之き、弦歌の声を聞く。夫子莞爾として笑ひて曰く、「鶏を割くに、馬くぞ牛刀を用ゐんや。」と。子游対へて曰く、「昔者、偃や諸を夫子に聞けり。曰く、『君子道を学べば、則ち人を愛し、小人道を学べば、則ち使い易きなり。』」と。子曰く、「二三子、偃の言は是なり。前言は之に戯れしのみ。」と。

※子游(姓は言、名は偃)は孔門十哲の一人。孔子より四五歳年少。二〇代で魯の武城という町の長官となる。その武城に孔子一行が訪れたときのやり取りです。孔子一行が子游に町を案内されると、町の家々から琴と唱和する歌声(礼楽)が聞えてきます。ハハ〜ン、子游は礼楽でこの町を治めているのだなと感心しますが、つい悪戯(いたずら)ところで皮肉な冗談を發します。それに対し子游は真摯(まじし)に応え、孔子は一本取られたと子游を称賛します。尚、「詩に興り、礼に立ち、楽に成る」ところで触れたように、孔子は、「礼」(礼儀や儀式)を社会秩序の根底に据え、「楽」で人々の心が和めば、社会の治安は保たれると門人を教化しています。

孔子一行が武城の町を訪れた時、琴の音と歌声が聞こえてきた。先生はにっこりと笑ってこう言われた、「鶏をさばくのにごうして大きな牛刀を使うのかな(この小さな町を治めるのに、国を治めるときはの礼楽を使うのは少し大げさではないか)。」と。子游は答えた、「以前にこの私・偃は、先生からこう聞きました、『為政者が道(儀礼と雅楽)を学ぶと人民を愛するようになるし、人民(小人)が道を学ぶと扱いやすくなる。(どんな人でも道を学ぶべきだ。)]』と。孔子は言った、「お前達、偃の言葉が正しいのだよ。先程の私の言葉はほんの冗談を言ったただけだ。」と。

● 衛君、子を待ちて 政を為さば

子路曰、「衛君待子而為政、子將奚先。」子曰、「必乎正名乎。」子曰、「有是哉、子之迂也。奚其正。」子曰、「野哉由也。君子於其所不知、蓋闕如也。名不正、則言不順。言不順、則事不成。事不成則礼樂不興。礼樂不興、則刑罰不中。刑罰不中、則民無所措手足。故君子名之、必可言也。言之、必可行也。君子於其言、無所苟而已矣。」

(子路)

子路曰く、「衛君、子を待ちて政を為さば、子將に奚をか先にせん」と。子曰く、「必ずや名を正さんか」と。子路曰く、「是れ有るかな、子の迂なるや。奚ぞ其れ正さん」と。子曰く、「野なるかな由や。君子は其の知らざる所に於いては、蓋し闕如たり。名正しからざれば、則ち言順はず。言順はざれば、則ち事成らず。事成らざれば、則ち礼樂興らず。礼樂興らざれば、則ち刑罰中らず。刑罰中ざれば、則ち民手足を措く所無し。故に君子之に名づくれば、必ず言ふべくするなり。之を言えば、必ず行ふべくするなり。君子其の言に於いて、苟くもする所無きのみ」と。

※孔子が衛の国の政治顧問になったらまず何をされますか？との問に対して、「名を正す(正名)」と答えていますが、この「正名」の解釈については昔からいろいろあるようです。ここでは「正名」を、立場や役割(名)に応じた守るべき本分(分)として、「名」と「分(実)」を合致させることと捉えておきます。「名は体を表す」と言います。ところで、孔子が衛に滞在していた時に、父の莊公と美子の出公との間で王位をめぐる争いがあり、大義名分は乱れ、衛の社会情勢は不穏な状況を呈していました。

子路が言った、「衛の国の君主が先生をお招きして政を委ねるとしたら、先生は最初に何をなさいますか」と。孔子は言った、「きつと名分を正すだろうな」と。(スケズケとものを言う)子路は言った、「これですからね、先生の迂遠さは。この急場に名分などを正しておれるものではありません」と。孔子は言う、「粗野だな由(子路)は。君子というものは、自分の知らない事については口だしせず黙っているものだ。名分が正しくないと言葉も順当に働かず、言葉が順当に働かなければ仕事も仕上がらない。仕事が仕上がらなければ、礼樂が盛んにならない。礼樂が盛んにならないと刑罰が公正さを失う。刑罰が公正を失うと、人民は不安で手足の置き場をなくしてしまう。だから君子たる者は、こうと名分を正しくしたなら、必ず言葉で説明できなくてはならない。言葉で説明するなら、必ずその通り実行できなくてはならない。君子は、発言にあたっては、いいかげんであつてはいけないのだ。」と。

●君を君とし、臣を臣とし、父を父とし、子を子とす

齊景公問政於孔子、孔子対曰、「君君、臣臣、父父子子。」公曰、「善哉。信如君、不君、臣、不臣、父、不父、子、不子、雖有粟、吾豈得食諸。」

(顔淵)

齊の景公 政を孔子に問ふ。孔子対へて曰く、「君を君とし、臣を臣とし、父を父とし、子を子とす。」と。公曰く、「善いかな。信に如し君、君とせられず、父、父とせられず、子、子とせられずんば、粟有りとも雖も、吾豈に得て諸を食らはんや。」と。

※当時、魯国の政治は公族の三桓氏（季孫氏・孟孫氏・叔孫氏）に牛耳られており、魯の二五代君主昭公は三桓氏の横暴を抑えるべく兵を起そうとしますが失敗し、齊国に亡命します。魯に仕えていた孔子は昭公を追って齊に行き、齊の重臣高昭子のもとに身を寄せます。この問答は、孔子が高昭子を通して齊の第二十六代君主景公に謁見したときの問答といわれています。世が下剋上の乱れ始めている情勢を踏まえ、「正名」（前項参照）こそが、政の奥義だと孔子は言います。

齊の景公が政のやり方について孔子に聞いた。孔子は言った。「君を君とし、臣を臣とし、父を父とし、子を子とす。」と。景公は言った、「善いことだね。真にもし、君が君とせられず、臣が臣とせられず、父が父とせられず、子が子とせられなかったら、穀物（粟）が豊かにあったとしても、（君であり、父であるところの）私は誰もそれを自分に食べるようにしてくれないものがない。」と。

●食を足し、兵を足し、民は之を信にす

子貢問政。子曰、「足食、足兵、民信之矣。」子貢曰、「必不得已而去、於斯二者何先。」曰、「

去兵。」子貢曰、「必不得已而去、於斯二者何先。」曰、「去食。自古皆有死。民無信不立。」

（顔淵）

子貢 政を問ふ。子曰く、「食を足し、兵を足し、民は之を信にす。」と。子貢曰く、「必ずしも必ずしも得ずして去らば、斯の二者に於て何をか先にせん。」と。子曰く、「兵を去らん。」と。子貢曰く、「必ずしも必ずしも得ずして去らば、斯の二者に於て何をか先にせん。」と。曰く、「食を去らん。古より皆死有り。民信無くんば立たず。」と。

※孔子の生きた春秋時代は、まだ至る所に独立の国家が並立する都市国家の時代で、各国家は城壁で町を囲い、人民はその中で生活をしていました。国家の君主は後世の時代のように絶対的な権力はなく、国家は人民からの信頼の上に成り立っていました。

子貢が政のやり方について孔子に質問した。孔子は言った、「食糧を十分にし、軍備を十分にし、そして人民に信頼させることだ。」と。子貢は言った、「どうしても三つ揃えることができないならば、このうち（食料・兵・信義）の何を先に取り去りますか。」と。孔子は言った、「軍備を取り去ろう。」と。子貢は言った、「その後に残った二つさえも充足することがどうしてもできないならば、どちらを先に取り去りますか。」と。孔子は言った、「食糧の方を取り去ろう。昔から食べ物がないとか、軍備が足りなかったために人民が死んだことは幾らもあるが、そのために国が滅びたことはない。しかし、民から信頼が得られなければ国は成り立っていない。それが滅亡の根本的な原因なのだ。」と。

■使命

●子、匡に畏す

子畏於匡。曰、「文王既没、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者、不得与於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何。」
(子罕)

子、匡に畏す。曰く、「文王既に没したれども、文茲に在らずや。天の將に斯の文を喪ぼさんとするや、後死者、斯の文に与かるを得ざるなり。天の未だ斯の文を喪ぼさざるや、匡人、其れ予を如何せん。」と

※匡は春秋時代の衛の国の邑(村)。孔子一行が衛から陳に向かう途中で匡を通りかかったとき、容貌・容姿が似ている陽虎(魯の三桓の季孫氏に仕えていたが、反旗を翻し、短命であったが魯の実権を握る)と間違えられます。陽虎は以前匡に攻め込んでおり、匡は陽虎がまた攻め来たとはかり兵を出して孔子一行を包囲しました。これが文頭の「匡に畏す」(匡の地で命の危険にさらされた)の内容です。命の危機に直面した孔子(この時五七歳)の並々ならぬ使命感とその決意が滲み出ています。尚、文王は殷代末期の周の君主で仁政を行った聖王とされます。

先生は匡で命の危険にさらされた。そのとき、言われた、「文王はとうの昔に世を去られたが、王が残された道德文化はこの私に脈々と息づいているではないか。天がこの道德文化を滅ぼそうとしているなら、文王の後に生まれ死んでいくこの私(後死者)が、その恩恵を受ける機会はなかったはずだ。しかし、天がまだこの道德文化を滅ぼさない以上、匡の人々など、この私をどうすることもできなからぬ。」と。

●期月のみにして可なり

子曰、「苟有用我者、期月而可也、三年有成。」

(子路)

子曰く、「苟くも我を用ゆる者有らば、期月のみにして可なり。三年にして成す有らん。」

※孔子が斉の国に留まって景公に仕えようとしたとき、斉の宰相晏嬰(晏子)は、「孔子をはじめとする儒者は、言葉巧みで信用できない。また、喪に服することを尊んで破産してまでも葬式を華美に行い、これを民が真似すると国が大変なことになる。」等々の理由で登用に反対され、残念ながら仕官の道は閉ざされます。孔子は遊説の先々で自身の献策・提言が受け容れられない胸の内の無念さがこの言葉にでています。尚、晏嬰は質素儉約で贅沢は一切せず、非常に優れた手腕で斉国を繁栄させた名宰相とされています。

孔子は言った、「もし私を政治家として採用してくれる人がいれば、僅か一年の間(期月)にそれなりの成果をあげよう。三年間もやらせてくれれば、立派にやり遂げてみせる。」と。

● 我は賈を待つ者なり

子貢曰、「有美玉於斯。韞匱而藏諸。求善賈而沽諸。」子曰、「沽之哉、沽之哉。我待賈者也。」

(子路)

子貢曰く、「斯に美玉有あり。匱に韞めて諸を蔵せんか。善賈を求めて諸を沽らんか。」と。子曰く、之を沽らんかな。之を沽らんかな。我は賈を待つ者なり。」と。

※子貢は孔子に仕官する気持があるかどうかを尋ねます。孔子は、もちろん仕官する気持は大いにあるぞ、声がかかるのを待っているのだ、と答えています。この話は孔子五〇歳の頃の話とされます。孔子五一歳のとき、念願がなつて魯の第二六代君主定公に仕官し、定公は孔子を中都の長官に任命しています。孔子五二歳の時、魯と齊兩國の平和会議が夾谷(山東省)で開かれ、孔子は定公の補佐として出席します。孔子は会議で大国齊を向こうに回して存分にその手腕を発揮し、魯国有利に導いて、齊が侵略した魯の地の失地回復に成功します。この功に対し、大司寇(最高裁・警察庁長官)に推戴されます。しかし、孔子の栄光は長く続かず、新風を吹き込む革新的政策に反旗を翻す魯国の病巣・旧勢力(三桓氏)からの激しい巻き返しに遭い、道半ばで頓挫。五五歳になつた孔子は魯を後にして以降十四年にわたつて諸国(曹・衛・宋・鄭・陳・蔡・楚)を遍歴しますが仕官の道は叶わず(尤も、子貢、子路、辛我、子夏などの弟子たちは魯や衛、齊などの国で宰相や重臣にとり立てられた)、魯に帰つてきてからは弟子の教育に専念することになります。

子貢は尋ねた、「ここに美しい玉(宝石)があると思います。箱に入れてしまつておきましょつか、それともよい買い手を見つけて売りましょつか。」と。孔子は言った、「売ろうとも、売ろうとも、私は買い手を待っているのだよ。」と。

● 夫れ我を召く者は、豈に徒らならんや

公山弗擾以費畔。召。子欲往。子路不説曰、「未之也。」子曰、「夫召

我者、而豈徒哉。如有用我者、吾其爲東周乎。」

(陽貨)

公山弗擾、費を以て畔く。召く。子往かんと欲す。子路説はすして曰く、「之くこと未きのみ。何ぞ必ずしも公山氏に之れのかんや。」と。子曰く、「夫れ我を召く者は、豈に徒らならんや。如し我を用ゐる者有らば、吾は其れ東周を為さんか。」と。

いくら黒土（涅）で染めても黒く染まらない」と。私は、どうして匏瓜（ひょうか）でいられようか。ただ、ぶら下がっているだけで、人に食べられもせずにおられようか」と。

● 天下道有らば、丘（きゅう）と易（か）へざるなり

長沮・桀溺耦（くわ）而耕（かう）。孔子過（あ）之（し）、使（つか）子路問津焉（しん）。長沮曰（い）、「夫（こ）孰（た）與（よ）者（もの）為（な）誰（た）」。子路曰（い）、「為（な）孔（こう）丘（きゅう）」。「是（こ）魯（ろ）孔（こう）丘（きゅう）と（と）對（たい）曰（い）、「是（こ）也（なり）」。「曰（い）、「是（こ）知（し）津（しん）矣（なり）」。「問（と）桀（けつ）溺（じやく）曰（い）、「子（こ）為（な）誰（た）」。「曰（い）、「為（な）仲（ちゆう）由（ゆう）」。「曰（い）、「是（こ）魯（ろ）孔（こう）丘（きゅう）之（し）徒（た）と（と）對（たい）曰（い）、「然（しか）し」。「曰（い）、「滔滔（たうたう）者（もの）、天（てん）下（か）皆（みな）是（こ）也（なり）」。「而（しか）誰（た）以（も）易（か）之（し）」。「且（かつ）而（しか）與（よ）其（その）從（したが）辟（へい）人（ひと）之（し）土（ち）也（なり）」。「豈（あ）若（ごと）從（したが）辟（へい）世（せい）之（し）土（ち）哉（なり）」。「耰（もち）而（しか）不（な）輟（てつ）」。「子（こ）路（ろ）行（かう）以（も）告（つ）」。夫（こ）子（こ）慚（ぞん）然（ぜん）曰（い）、「鳥（ちゆう）獸（じゆう）不（な）可（か）與（よ）同（どう）群（ぐん）。吾（われ）非（ひ）斯（す）人（ひと）之（し）徒（た）と（と）而（しか）誰（た）與（よ）。天（てん）下（か）有（あ）道（どう）、丘（きゅう）不（な）與（よ）易（か）也（なり）」。

（微子）

長沮・桀溺耦して耕す。孔子之を過ぎ、子路をして津を問はしむ。長沮曰く、「夫の與を執る者は誰と為す。」子路曰はく、「孔丘と為す。」と。曰く、「是れ魯の孔丘か」と。対へて曰く、「是れなり。」と。曰く、「是れ津を知らん。」と。桀溺に問ふ。桀溺曰く、「子は誰と為す。」と。曰く、「仲由と為す。」と。曰く、「是れ魯の孔丘の徒か。」と。対へて曰はく、「然り。」と。曰く、「滔滔たる者、天下皆是れなり。而るを誰と以にか之を易へん。且つ而其の人を辟くるの土に従はんよりは、豈に世を辟くるの土に従ふに若かんや。」と。耰して輟めず。子路行きて以て告ぐ。夫子慚然として曰く、「鳥獸は与に群を同じくすべからざるなり。吾斯の人の徒と与にするに非ずして、誰と与にかせん。天下道有らば、丘とに易へざるなり。」と。

※孔子一行が偶然にも畑を耕している二人の隠者 長沮と桀溺に出会い、子路に渡し場の場所を尋ねさせた際の問答です。長沮はあの博学高名な孔子様なら渡し場の場所くらい知っているだろうと素知らぬ顔をします。そこで桀溺に尋ねると、桀溺は「孔子に付きしたがって堰き止めようもなく乱世へ向かう世を変えようと無駄な骨折りをするよりも、我々（隠者）と共に暮らそうではないか。」と言います。子路からそのことを聞いた孔子はがっかりし、私は鳥や獸（隠者）とはなく、現世を生きる人間と一緒に世直しの努力をしてゆきたいのだと、その使命感を迸らせずす。

長沮と桀溺が二人並んで畑を耕していた。孔子一行がそこを通りがかり、子路に渡し場を聞きに行かされた。長沮が言った「あそこで馬車の手綱をもっている人は誰かね。」と。子路が言った「孔丘です。」と。長沮は言った、「魯の孔丘か。」と。子路は言った、「はい、そうです。」と。長沮は言う、「それな

ら（あちこち巡り歩いているので）渡し場くらい知っているだろう。」と。そこで子路は仕方なく傍らの桀溺に尋ねた。桀溺は言った、「あなたは誰だね。」と。子路は言う、「仲由と言います。」と。すると桀溺は言った、「魯の孔丘の門人かね。」と。子路は「そうです。」と答えた。すると桀溺は、「今の世の中、勢いのある水の流れのように堰き止めることができず、乱世に向かっている。それなのに一体誰と一緒に世を変えようというのか。お前さんは、つまらない人を避けて立派な人に伝えようと選り好みしている孔丘についていくより、いっそ世間を棄てた人についていった方がいいのではないか。」と言って、種蒔き、土をかぶせる（覆）手を止めなかった。子路はその場から去って孔子にこの話を告げた。先生はがっかりして言った、「鳥や獣とは私たちは一緒に暮らすことはできないぞ。私は、この人間の仲間と一緒にやって行くのでなかったら、誰と一緒にやって行くというのだね。この世の中に正しい道が行われているなら、丘もみんなと一緒に世の中を変えて行くこうなどはしないぞ。」と。

● 四体勤めず、五穀分かつたず。孰をか夫子と為す

子路従而後。遇丈人以杖荷條。子路曰、「子、見夫子乎。」丈人曰、「四体不勤、五穀不分。孰為夫子。」植其杖而芸。子路、拱而立。止子路宿、殺鷄為黍而食之、見其二子焉。明日、子路行以告。子曰、「隱者也。」使子路反見之。至則行矣。子路曰、「不仕無義。長幼之節、不可廢也。君臣之義、如之何其廢之。欲潔其身而亂大倫。君子之仕也、行其義也。道之不行、已知之矣。」

（微子）

子路従ひて後る。丈人の杖を以て條を荷ふに遇ふ。子路曰く、「子、夫子を見たるか」と。丈人曰く、「四体勤めず、五穀分かつたず。孰をか夫子と為す。」と。その杖を植てて芸る。子路、拱して立つ。子路を止めて宿せしめ、鷄を殺し黍を為りて之を食らはしめ、その二子を見えしむ。明日、子路行きて以て告ぐ。子曰く、「隱者なり。」と。子路をして反りて之を見しむ。至れば則ち行れり。子路曰く、「仕へざれば義無し。長幼の節は、廢すべからざるなり。君臣の義は之を如何ぞ其れ之を廢せん。その身を潔くせんと欲して大倫を乱る。君子の仕ふるや、其の義を行ふなり。道の行なはれるは、已に之を知れり。」

※孔子一行に遅れた子路はある老人と偶然に出会います。子路は老人に、「私の先生を見かけませんでしたか」と尋ねると、「汗水たらして働きもせず、五穀の区別もできないような人間がどうして先生なのか。」と誹謗するような言葉を吐きます。子路は、ハハハ、この老人は孔子先生を知っているなど直感し、拱手の礼をとって返事を待ちます。子路の素直な態度を見て、老人は自分の家に泊まらせて料理でもてなし、二人の子供も紹介します。翌日、子路は老人の家を去り、孔子に追いついて事の次第を告げると、孔子はその老人は隱者だと判断します。そこで子路に「もう一度戻ってこよう言つてきなさい。」と仕向けます。行くと老人は不在だったので、その子供た

ちに孔子の伝言を伝えます。「御尊老は人間関係の煩わしさを避けて隠棲されているが、子供を年長者であり客人である子路に紹介するなど、長幼の序という人間関係の秩序を守ったではないですか。君子は仕官することによって君臣の義を実践するのです。ご尊老が我々を軽蔑するいわれはないし、ご尊老は世に出て仕官しないことによつて人間関係の秩序を乱しているのですぞ(自分勝手な振る舞いが人としての道を踏む外していませんぞ)。」と。

子路が孔子一行に遅れてしまった。たまたま一人の老人(丈人)が杖の先に竹かご(條)を掛けて担いでくるのに出会った。子路が言った、「御尊老、私の先生を見かけませんでしたか。」と。老人は言った、「手足も動かさず、五穀(米・黍・稗・粟・麦)の見分けも知らない。そんな人のだれが私の先生なのかね。」と。持っていた杖を地面に突き立てると草刈りをはじめた。子路は、これは只者ではないと直感してつやうやしく手を組んで立っていた。すると老人は、子路を引きとめて自分の家に泊らせ、鶏を殺し黍飯を炊いてご馳走し、二人の子供も紹介した。翌日、子路は孔子一行に追いついてそのことを孔子に話した。孔子は言った、「それは隠者だね。」と。孔子は子路に、もう一度そこに戻つて会わせようとした。子路がその家に戻り着くと老人は外出していたので、子路は留守の子に(孔子の言葉を)伝えた。「仕官しなければ君臣の義は無くてもよい。しかし、人としての長幼のけじめはなくなることができない。同様にして君臣の義だつてどうしてなくなることができようか。あなたは自身身を清潔に保とうとして、人としての大切な道(人倫)を乱しているのだ。君子が仕官するのは、君臣の義を実践してゆくためである。今の世の中に正しい道が行われていないことは、とつくに分かっている。」と。

■ 孔門十哲

徳行・言語・政事・文学の四つの科目を孔門の四科といひます。『論語』先進篇には、「徳行顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語宰我、子貢、政事冉有、季路、文学子游、子夏」と書かれていて、各科目で特に優れたもの十人を「孔門の十哲」とか「四科十哲」と呼んでいます。

○ 徳行	顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓
○ 言語	宰我、子貢
○ 政事	冉有、季路
○ 文学	子游、子夏

さて、本稿の最後に「孔門の十哲」と呼ばれる十人の人柄や孔子との交流ぶりを見てゆくことにします。

● 顔淵 賢なる哉回や (徳行)

子曰、「賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改楽。賢哉回也。」(雍也)

子曰く、「賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂ひに堪へざるも、回や其の樂しみを改めず。賢なるかな回や。」と。

※顔淵、字は回。魯の出身で孔子が最も可愛がった門人。顔淵は名譽榮達を求めず、その暮らしぶりは極めて質素で、死んだときも棺の外側を囲む外棺が買えなかつた程といわれます。ひたすら孔子の教えを理解し実践することに精進しています。

孔子は言う、「偉いものだね、顔回は。わりご二杯の飯とひさざ」(瓢簞)のお椀一杯の飲み物で、狭苦しい路地に住んでいる。普通の人なら、とても生活のつらさに堪えきれないのに、回はそうした貧窮の中でも道を修める楽しみを止めようとはしない。偉いものだね、顔回は。」

● 顔淵死す

顔淵死。子哭之慟。従者曰、「子、慟矣」。曰、「有慟乎。非夫人之為慟、而誰為。」 (先進)

顔淵死す。子之を哭して慟す。従者曰く、「子慟せり。」と。曰く、「慟すること有るか、夫人の為に慟するに非ずして、誰が為にかせん。」と。

※顔淵は孔子七十一歳の時、四十一歳の若さで早逝しています。同じく先進の篇に、「噫、天予れを喪ぼせり、天予れを喪ぼせり。」と孔子の深い悲しみが載っています。

顔淵が死んだ。孔子は我を忘れ、身を震わして哭泣した。お供の者が「先生、慟哭されましたね。」と言つと、孔子は「慟哭していたかな。しかし、(顔淵)あの人のために慟哭するのになかつたら、一体誰のためにするといふのか。」と言われた。

● 閔子騫 (德行)

季氏、使閔子騫為費宰。閔子騫曰、「善為我辞焉。如有復我者、則吾必在汶上矣。」 (雍也)

季氏、閔子騫をして費の宰たらしめんとす。閔子騫曰はく、「善く我が為に辞せよ。如し我を復びする者あらば、則ち吾は必ず汶の上^{ほとひ}に在らん。」と。

※閔子騫は孔子より十五歳年少。孔子より「孝なるかな閔子騫」(先進篇)とその孝行ぶりを誉められています。

季氏は既に説明した魯の三桓の一人季孫氏のこと。費はその領地の一部。汶は汶水で、魯の北方、齊との国境を流れる川。閔子騫は、謀反を起こすような季氏の下には仕官したくないとキツパリと断っています。

季孫氏が閔子騫を費（山東省費県）の長官にしようとした。閔子騫は言った、「どうぞ私のためにうまくお断りください。もし私にまた再び仕官を勧めにくるものがいれば、私はきつと汶水のほとりに行くことでしよう。」と。

● 冉伯牛（德行）

伯牛有疾。子、問之、自牖執其手曰、「亡之。命矣夫。斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也。」
也。
（雍也）

伯牛疾有り。子、之を問ひ、牖より其の手を執りて曰く、「之れ亡からん。命なるかな。斯の人に於て斯の疾有るや、斯の人に於て疾有るや。」と。

※冉伯牛は魯の人で、德行にすぐれた。生没年不詳。病氣はハンセン氏病といわれる。

伯牛が病氣になった。孔子は見舞いに行き、窓ごしにその手を取って言った、「こんなことがあっていいものか。これも天命なのだなあ。こんな立派な人にしてこんな病にかかるとは。こんな立派な人にしてこんな病にかかるとは。」と。

● 仲弓（德行）

子曰、「雍也可使南面。」仲弓曰、「問子桑伯子。子曰、「可也。簡。」仲弓曰、「居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎。居簡而行簡、無乃大簡乎。」子曰、「雍之言、然。」
（雍也）

子曰く、「雍や南面せしむべし。」と。仲弓、子桑伯子を問ふ。子曰く、「可なり、簡なり。」と。仲弓曰く、「敬に居て簡を行ひ、以て其の民に臨まば、亦可ならずや。簡に居て簡を行ふは、乃ち大簡なること無からんや。」と。子曰く、「雍の言、然り。」と。

※仲弓は字で姓は冉、名は雍。魯国の人で孔子より二九歳若い。才徳兼備の弟子と言われた。「南面せしむべし」とは、君主は北に居て南に向かつて座り政治を行った（南面）ことから、君主の器量があるという意。子桑伯子なる人物は当時の政治家と思われるが不明。仲弓は、寛大な態度で人民に接するのはよいことですが、心まで寛大（ルーズ）となつては君主として示しがつかなくなりますね、と一本くぎを刺しています。

孔子は言った、「雍は君主に据えてもよい人物だな。」と。仲弓は、子桑伯子はどうでしょうかと問うた。孔子は言った、「結構だ。寛大だからな。」と。仲弓は言った、「慎み深い心を持ち、寛大な態度

で行動し、それでその人民に接してゆくのは大変良いことです。しかし、寛大な心を持ち、寛大な態度で行動する、ということになると、むしろ大まかすぎませんでしょうか。」と。孔子は言った、「雍の言葉は正しい。」と。

● 宰我 (言語・弁舌)

宰我問曰、「仁者雖告之曰井有仁焉、其從之也。」子曰、「何爲其然也。君子可逝也、不可陷也。可欺也、不可罔也。」

(雍也)

宰我、問ひて曰く、「仁者は之に告げて井に仁有り」と曰ふと雖も、其れ之に従はんや。」と。子曰く、「何為れぞ其れ然らんや。君子は逝かしむべきなり、陥るべからざるなり。欺くべきなり、罔ふべからざるなり。」と。

※宰我は昼寝して孔子の講義をさぼり、叱られた宰吾のこと。宰我が孔子に仁者の心を問うに、「人が井戸に落ちたと聞いたら仁者はすぐに井戸に飛び込んで助けますか」と質問します。それに対して孔子は、仁者はそんな妄動的な行動はしないぞ、と答えています。

宰我が質問した、「仁徳ある人は、井戸の中に仁者が落ちていると言われたら、飛び込んで助けるでしょうか。」と。孔子は言った、「どうしてそんなことをしようか。君子を井戸端まで行かせることはできるが、井戸に落ち込ませることはできない。君子を欺くことはできようが、理性を失わせることはできないぞ。」と。

● 子貢 (言語・弁舌)

子貢問曰、「賜也何如。」子曰、「女は器なり。」子曰、「何の器ぞ。」子曰、「瑚璉也。」

(公冶長)

子貢問ひて曰く、「賜や何如。」と。子曰く、「女は器なり。」と。曰く、「何の器ぞ。」と。曰く、「瑚璉なり。」と。

※賜は子貢のこと。孔子に自分はどんなものですかと問うと、孔子は「お前は器だね。」と答えます。八テ、どんな器か重ねて聞くと、宗廟のお供えを盛り付ける瑚璉の器だよ(つまり、どこに行っても立派に政治を行うことができる人物だよ)と答えます。

子貢が孔子に質問した、「私はどんなものでしょうか。」と。孔子は言った、「お前は器だね。」と。子貢が言う、「何の器でしょうか。」と。孔子は言った、「瑚璉の器だ。」と。

● 冉有 (政事)

冉求曰、「非不説子之道、力不足也。」子曰、「力不足者、中道而廢。今、女画。」 (雍也)

冉求曰く、「子の道を説ばざるに非ず。力足ざるなり。」と。子曰く、「力足らざる者は、中道にして廢す。今、女は画れり。」と。

※冉有、名は求、字は子有。孔子より二九歳年下。行政手腕に優れ魯の季孫氏に用いられた。孔子は冉有の政治の才を認めています (孔子は季康子の問いかけに、「求は芸あり、政に従ふに於か何か有らん。」(雍也) = 求は才能豊かで政治に当たるくらいい何でもありません = と答えています)。この問答は冉有の泣き言に対して孔子はしっかりと激励しています。

冉求が言った、「先生が説かれる道を学ぶことを嬉しく思わないわけではありません。私は力が足りないのです (先生の道にはついていけません)。」と。孔子は言った。「力が足りない者は途中で力尽きて止めてしまうものだ。しかし今、お前は自分で自分を見限っているではないか (勝手に見限ってはだめだよ)。」と。

● 季路 (政事)

子曰、「道不行、乘桴浮于海。從我者其由与。」子路、聞之喜。子曰、「由也、好勇過我。無所取材。」 (公冶長)

子曰く、「道行はれず、桴に乗りて海に浮かばん。我に従ふ者は其れ由か。」と。子路、之を聞きて喜ぶ。子曰く、「由や勇を好むこと我に過ぎたり。材を取る所無し。」と。

※今の世、なかなか正道が行われないもんだ、いつそ筏に乗って海に繰りだそうかと孔子は口にし、はて、その時についてくるのは由 (子路) かな、と呟きます。それを聞いた子路 (季路) は大喜びしますが、そんな一本気な子路を孔子はたしなめています。

孔子は言った、「正しい道がこの世に行われていない。いつそ筏にでも乗って海に浮かぼうか。そのとき、私について来るのは由 (子路) かな。」と。子路、これを聞いて大いに喜んだ。すると孔子は言った、「由よ、お前の勇ましいこと好きは私以上だが、しかしまだ、筏の材木もとってきていないのだ。」と。

● 子游、子夏 (文学)

子游曰、子夏之門人小子、当洒掃應對進退、則可矣。抑末也。本之則無。如之何。「子夏、聞之曰、「噫、言游過矣。君子之道、孰先傳、孰後倦焉。譬諸草木、區以別矣。君子之道、焉可誣也。有始有卒者、其唯聖人乎。」

(子張)

子游曰く、「子夏の門人小子は、洒掃應對進退に当たりては、則ち可なり。抑も末なり。之に本づけば則ち無し。之を如何。」と。子夏、之を聞いて曰く、噫、言游過てり。君子の道は、孰れをか先に傳へ、孰れを後に倦まん。諸を草木の区にして以もって別あるに譬ふ。君子の道は、焉くんぞ誣ふべけんや。始め有り卒はり有る者は、其れ唯だ聖人か。」と。

※子夏は子游の一歳上で同世代に属します。子游は子夏に、君の門人の若い者は掃除や客への対応などは粗相がないが、そんなことは些末なことだ。道の根本を理解しているとは思えないが、と批判します。それに對し子夏は、門人の力に應じたことを教えているのだよ、いきなり根本を教えるのは相手が聖人じゃあるまいしできるわけがないだろうと答えています。

子游は言った、「子夏門下の若者たちは、水撒き、掃除、客への対応などの振る舞いは、まあよくできているな。しかし、そんなことはそもそも末のことだ。道の根本はといえば何もない。どうしたことか。」と。子夏はそれを聞くと言った、「ああ、言游(子游)は間違っている。君子が人を教導する方法には、どれを先に教え、それを面倒だから後回しにするとかいうものではない。(門人の深淺に應じて教えるまでだ)。ちよつど草木も種類によつて育て方が違つようなものだ。君子が人を教えるに、力のないものに無理強いしたりしてごまかせるものではない。始めもあれば終わりもある、本末(なにもかも)が兼ね備わっているのは、まあ聖人だけだろうね。」と。

● 参考図書

- ・ 鎌田正監修 江連隆・若林力「漢文名作選1」昭和59年 大修館書店
- ・ 宮崎一定「論語の新しい読み方」2000年 岩波書店
- ・ 日経おとなのOFF「論語入門」October 2011 No.124 日経BP
- ・ 貝塚茂樹「中国文明の歴史 2春秋戦国時代」2000年 中央公論新社
- ・ 金谷治「論語」1999年 岩波書店